

務川慧悟 ピアノリサイタル

第Ⅰ部

フランス風序曲 口短調 BWV831 J.S.バッハ
プレリュード、コラールとフーガ 口短調 フランク

第Ⅱ部

6つのプレリュードとフーガ Op.99より 第2番 二長調 レーガー
10のコラール前奏曲より 第4番 ト長調『今ぞ喜べ、愛するキリストのともがらよ』 J.S.バッハ=ブゾーニ
半音階的幻想曲とフーガ 二短調 BWV903 J.S.バッハ
シャコンヌ 二短調 J.S.バッハ=ブゾーニ
24のプレリュードとフーガより 第15番 変ニ長調 ショスタコーヴィチ

冬

2023
四季コンサート
40周年記念

2023年12月14日(木) 17:45開場 18:30開演
会場: アクトシティ浜松 中ホール
主催: 浜松音楽友の会

プロフィール

務川慧悟(むかわ けいご)ピアノ

2021年世界三大コンクールの一つである、エリザベート王妃国際音楽コンクールにて第3位受賞。2019年にはフランスで最も権威のある、ロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクールにて第2位受賞。

長い歴史と伝統のある2つの国際コンクールの上位入賞で大きな注目を集め、現在、日本、ヨーロッパを拠点にソロ、室内楽と幅広く演奏活動を行っている。バロックから現代曲までレパートリーは幅広く、各時代、作曲家それぞれの様式美が追究された演奏、多彩な音色には定評がある。また現代ピアノのみならず、古楽器であるフォルテピアノでの奏法の研究にも取り組んでいる。

フランス留学後研究を深めている作曲家の一人である、モーリス・ラヴェルの作品を取り上げた「ラヴェルのピアノ作品全曲演奏」をテーマにした全6回のリサイタルを2017年シャネル・ピグマリオン・デイズにおいて開催。

東京藝術大学を経て、2014年パリ国立高等音楽院に審査員満場一致の首席で合格し渡仏。ピアノ科第3課程を修了、室内楽科第1課程修了。現在は国内外での演奏活動の傍ら、フォルテピアノ科に在籍し研鑽を積んでいる。

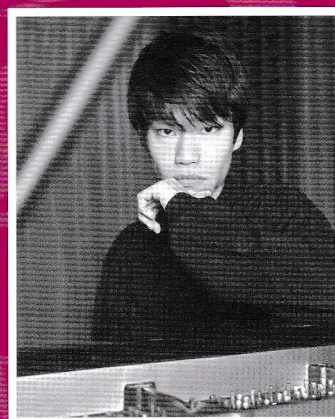
これまでに、日本各地、フランス、ベルギー、スイス、ラトビア、ドイツ、イタリア、ポーランド、オランダ、中国、台湾、韓国にて演奏会を開催のほか、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、プラハ・フィルハーモニア管弦楽団、フランスにてフランス国立管弦楽団、ロレーヌ国立管弦楽団、ベルギーにてベルギー国立管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニー管弦楽団等と共演。

第33回日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。

2022年、NOVA Recordより「ラヴェル:ピアノ作品全集」をリリース。

Official Website <https://keigomukawa.com/>

務川慧悟
ピアノリサイタル



©Yuji Ueno

●J.S.バッハ:フランス風序曲 口短調 BWV831

1734年に作曲され、イタリア協奏曲と並んで35年出版『クラヴィーア練習曲集 第2部』に所収された。曲集においてバッハ自身がイタリア趣味による協奏曲とフランス様式による序曲からなるチェンバロのための作品と明記しているように、この作品がイタリア様式と対比的なフランス様式を備えた作品として作曲されたことは明らかである。冒頭の序曲が典型的なフランス式序曲の形式に従って書かれている一方、その後続く舞曲の配列は自由で、終曲に置かれた短調の「エコー」は2段鍵盤のチェンバロを用いると強弱が変化しながら共鳴し合うエコーのような効果を得る。とはいえ、第1曲目の序曲がとりわけ長いこととその音楽の重厚さから考えてバッハは伝統的なフランス式序曲に最も重きをおいたのだろう。

●フランク:プレリュード、コラールとフーガ 口短調

1884年に作曲され、J.S.バッハをはじめ後期バロックの代表的形式であったプレリュードとフーガの形式を刷新した画期的な作品と評価された。全体はプレリュードとフーガの間にコラールを加えた3部分で構成され、その間を共通する主題がつなぐ。本来、プレリュードはより自由な形式で調性を確立し、次にくるフーガの前兆たる役割をもつが、この作品におけるプレリュードはオクターヴのバスなどコラールとフーガで現れる要素と音楽全体を包む荘厳さをすでに備えており、全体に統一感をもたせるためにより重要な役割を与えられている。

●レーガー:6つのプレリュードとフーガ Op.99より 第2番 二長調

レーガーはオルガン奏者として活躍し、優れたオルガン作品を多く残した作曲家で、対位法を用いた作品のいたるところにJ.S.バッハの影響をみることができる。ピアノ作品にもその特徴は現れており、とりわけ1906年に書かれたこの作品はレーガーにとって厳格なポリフォニー音楽としての集大成的作品であるといえる。その中で第2番は、疾走するような音楽が表情を次々変えるように展開するプレリュードに対し、フーガでは洗練された簡潔な主題が巧みに編み合わされ、小さな規模の中に極めて体系的な音楽が構築されている。

●J.S.バッハ=ブゾーニ:10のコラール前奏曲より 第4番 ト長調『今ぞ喜べ、愛するキリストのともがらよ』

J.S.バッハの作品をブゾーニがピアノ編曲した作品。フェルッチョ・ブゾーニはピアニスト、指揮者、作曲家など多くの分野で活躍した音楽家で、バッハ作品の改訂者としても知られる。ブゾーニはピアノ演奏の高い技能を活かしてバッハのオルガン作品から数曲をピアノ曲に編曲しており、本作品もその一つ。原曲の作曲年は明らかになっていないが、バッハが聖トーマス教会で礼拝音楽や合唱団を取り仕切る職カントルに就任していたライプツィヒ時代の作品であると考えられている。快速の明るいパッセージが絶え間なく全体を貫き、声部を拡大して最後は力強く終止する。

●J.S.バッハ:半音階的幻想曲とフーガ 二短調 BWV903

作曲年は明らかになっていないが、バッハが弟子のレッスンの教材として用い、曲の革新性に着目した弟子たちによって数多くの写譜が残されたことで有名な作品である。冒頭の音階による走句をはじめとした幻想曲で現れる即興的なパッセージは、聴く者に厳格なバッハの音楽とは異なるイメージを抱かせる。しかし、劇的な幻想曲を経てフーガに至ると、半音階書法を用いつつ緻密な和音進行と異名同音的転換でもって展開していく調性の変化が厳密なフーガの形式を想起させる。西洋音楽の革命児であったベートーヴェンがこの作品を好んで研究したというエピソードが示すように、衝動に身を任せる幻想曲と秩序に従順なフーガとの間を半音階的書法が結びつという独自性と先駆性を備えた作品である。

●J.S.バッハ=ブゾーニ:シャコンヌ 二短調

先述の曲同様、この曲もブゾーニによるバッハ作品の編曲である。原曲は〈無伴奏ヴァイオリン・パルティータ〉の第2番で、その終楽章にあたる「シャコンヌ」はしばしば単独で演奏されるほど壮大で、ヴァイオリンの多彩な演奏効果を狙った技巧的な曲といえる。曲全体を占めるのは変奏をベースとしたポリフォニックな音楽で、調性の対比といい緩急の起伏といい、単なる変奏ではなく周到に計算された配置で音楽が展開していく。

●ショスタコーヴィチ:24のプレリュードとフーガより 第15番 変二長調

純粋な器楽作品をあまり書かなかったショスタコーヴィチが作曲した数少ないピアノ独奏作品の一つ。プレリュードとフーガの形式に目を向けるきっかけになったのは、ショスタコーヴィチ自身が1950年にライプツィヒで行われたバッハ没後200年の記念祭を訪れたことだった。着手した当初は自身の対位法の習作という位置付けだったが、創作意欲をかき立てられ、瞬間に48曲を書き上げた。結果として、バッハの『平均律クラヴィーア曲集』の影響を受けた「対位法形式の芸術的小品による大規模なツィクルス」と本人に言わせるほどの記念碑的作品となった。第15番のプレリュードは3拍子の舞踊風で生き生きと躍動するリズムが特徴的。続くフーガでは11音の音列技法が用いられており、無調の響きが支配的だが、それが変拍子のリズムとあいまって強い推進力を生み、演奏の高い技巧性に支えられながら駆け抜けるように終わりへ向かう。

アンコール曲

- ・ドビュッシー/アラベスク第1番
- ・ショパン/ポロネーズ第6番 変イ長調 Op.53 『英雄』